

「〇〇し合う」人や動きを紹介する地域福祉マガジン

グッチョ

G u c c h o

VOL.40





（上）精神障害と向き合いながらライターとして活動する女性を取り上げた15号の表紙写真（左）30号の巻頭写真の日々＋カフェ前。撮影の瞬間には雪が降りました。「奇跡みたい」と参加者一同にも評判の一枚でした



グッチョと私、そしてこれから

【みんなで公開ミーティング】

令和3年7月に創刊した本紙は、多くの人に支えられて40号の発行に至りました。これまでに執筆した職員や取材を受けてくれた人、そして発行を楽しみにしてくれている人と一緒にミーティングを開催。グッチョの感想や印象、今後の期待などを話し合いました。

聞き手：グッチョ編集担当・フトシ

写真やキャプションも魅力

—皆さん、今日はありがとうございます。はじめに皆さんとグッチョの思い出や、これまでの記事で印象に残っている場面などをお聞きできますか

藤野（以下、藤） ええ、私やっぱり写真が大好き。なんか切り取り方とか。取材してもらった時の雪が降ってる集合写真。あの時にだけ降ってきてね。

高野（以下、高） あれいい写真！

藤 そうそうそう。そして記事をね、読むじゃないですか。そしたら、写真のキャプションについていうのかな、ここに結構重要なことがいっぱい書いてあるんですよ。

—ページ数には限界があるじゃないですか。それでも落としたいくない情報をキャプションに逃がしたり、写真と合わせて読んでほしい話題を載せたりします。

藤 確か、ピアスさんの話（15話※）。パソコンを障害者年金で買ったというエピソードがキャプションにあって。なんかこう、そういうことを思いながら年金を使っただ、なるほどなって。

高 赤裸々なことがさらっと書いてあるのですごく臨場感があります。30万円って額が載ってる。それを返すために頑張ってるっていうのが。表紙の後ろ姿の写真もセンサー

シヨナル。顔を出すか出さないかを迷っているという話だったけど、顔出し以上に文章の中で表現されてるみたいな。表紙も含めて物語になっていると思います。

気づきは読者以外にも

—グッチョは九州アートディレクターズクラブアワード2023で審査員特別賞をいただきました。応募を勧めてくれたのは高野さんでした。グッチョの特徴をどう見えていますか。

高 写真は私も好きです。文章の代わりに伝えるというか、そういう撮り方。登場している人たちの暮らしぶりとか状況がわかるので、ちょっとした写真からも意味が浮き上がってくるんですよ。写真を撮った意味とか意図っていうのが。

寺崎（以下、寺） メインの見出しも工夫があるんですね。この一言と表紙の写真で、なんか引き込まれる。号によっては『これどういふことかな』って疑問になる見出しもあるけど、読み進めると、あ、こういうことなんだっていうふうに、自分の中でつながって、なんか腑に落ちます。

高 好きな号だと、美容室と惣菜屋さんで行われる物々交換の話（27話）は好き。あと、ホームレス支援の話（24話）で、「生きていることで恩返し」という言葉に私が救われて。もう、生きているだけでいいんだって思

※過去記事は裏表紙のQRコードから



公開ミーティングに参加してくれた皆さん。左からねにひつじこと淵上祥子さん（32号を執筆。地域福祉課）、高野志乃扶さん（創刊時からグッチョを応援。みやま市職員）、藤野薫さん（30号で取材対応。久留米市手をつなぐ育成会代表）、寺崎研一郎さん（29号を執筆。保健所保健予防課・社会福祉士）。会場は30号の舞台となった日々＋カフェ、3月25日に開催しました。



九州ADCアワード2023の審査員特別賞のトロフィー。選者でデザイナーの福田まやさんは「地域のいろんな人にフォーカスして助け合える社会を目指しているのが良かった」と講評

えました。また、炊き出し活動について「月1回程度じゃ食事支援にはならない。でも、やる意味は絶対にある」とか。救われる言葉がとても印象に残っています。あと文章が優しいですね。

—記事を書いた2人は、実際に執筆してどうでしたか。

寺 福祉の専門職は日常的に人と関わるので、関係者との振り返りの局面はあります。でも、その人の気持ちというか、引きこもり気味の30年間をどういう気持ちで過ごしたのかみたいな振り返りって、支援という関係性ではなかなかできないんです。今回



公開ミーティングに合わせてホームページから印刷してきた藤野さん。「このコピー用紙の手触りも好きなの」という言葉に「私も絶対紙に出します」と淵上さんも応えました



(上) 高野さんのお気に入り「命を支えるということ」で取り上げたNPO法人が開催する炊き出し(右) 寺崎さんが執筆した「30年ぶりの外食」の表紙写真。「このホットサンドが絶品」と本人を誘ったコミュニティカフェでも取材しました



る仕事ができるって最高でした。

藤 すごく素敵な雰囲気でしたね。私は、ネギの束ね作業をする高齢者の居場所(35話)も楽しそうだった。何か作業しながらがちょうどいいんでしょうね。

淵 そう、これもなんかハンドベルってことで、何か口実を作って集まってるからいいんです。なんとなくお茶飲もうってだけじゃないから、いろんな人が集まれるのかな。

よく分からないけど心に届く

ー少し真面目なこと言うと、記事を書くことで、ちよつとした地域福祉的ポイントに気づけたりするのが醍醐味で。でも、それをスパッと表現するのが難しいんです。すごく感覚的なものだから。なので、キーワードを文章とか見出しとかにちりばめて、なんとなく大切なことが浮かび上がってくるような感じで執筆していますね。藤野さんは取材を受けてどうでしたか。

藤 嬉しかったですよ。日々カフェができてすぐの頃で。こういったカフェはそんなに珍しくはないんで、取材は来ないだろうと思っていました。でも、私たちが活動で大切に行っている『親が亡くなった後の隙間の支援』の話をフトシさんに話したら『それを合わせて記事にしましょう』って言ってくれてね。通底している『地域とのつながり』を感じてもらって嬉しかったです。

の執筆は仕事の延長線だったけど、取材という形だったからか、普段どの部屋のどの場所にいて、何を思いながら過ごしたのかとかも聞きました。私も普段と違う気づきがあったし、本人にもあったように思います。

淵上(以下、淵) あの記事は私も好きです。独白スタイルで没入感があって良かった。高 取材っていう手法は有効だと感じます。人と向き合い、深掘るっていうのは、行政職にとって必要なスキルだと思います。

淵 本場にそう。取材という名目で接点を作れるってうらやましいなって思っていました。市役所が出してる冊子だから安心感はあるだろうし。市職員として『地域に入れ』って言われてもどうやって?って思うけど、グッチョの取材って理由があれば行ける。

高 取材という手法が、私たちの職場に広まっていくといいなと思います。

喜んでもらえる仕事って最高

ー誰でも書けるようにしたのはそういう思いからです。淵上さんはどうでしたか?

淵 その前に私とグッチョの関係を。地域福祉課に来る前から読んでたけど、ここに来て舞台裏が見れるようになりました。まず、こういうネタで行こうと思うってところから聞くんですよ。へえ、そんな人いるんだって。で、取材してきたらこんな感じだったって聞く。そのうち、試し刷りを作ったって、まだ



(左) たんぽぽの会の表紙写真。帽子やスモッグ、ワッペンなど衣装の多くが手作りです(上) 同会の取材風景。「本当に素敵な現場で。その日は天気も良くて『ここは天国みたい』って、ずっと思っていました」と淵上さん

温かいコピー用紙が差し出される。で、読むでしょう。発行後は読者からの反響とかも聞く。

正直書くまでは、私には無理かもって思っていました。秋山さん(フトシの名字)に『書いてみらん』って、いくつかネタを見せてくれて。その中にすごく興味のあるものがあった。迷わず、たんぽぽの会(32話)を選びました。おそろいの手作り衣装がかわいすぎて。取材前は書けることがあるかなって不安に思ってたけど、取材したらページに収まらなくなつて。取材も書いてるのも楽しかった。何より市民に喜ばれ



25話「外国人の課題は日本人」の中の一枚。高野さんは「ちょっとした写真からも一人一人の意味みたいなのが浮かび上がってくる。さらっと見られないというか」と話します

フトシさんって言った言葉をそのまま書かないですよ。言いたいことを汲み取って書くんです。そこが特徴かも。あと、記事の最後の写真に『関わらないと見えないことがある。感じることで変わるものがあるって』ってフレーズが添えられているんです。意味はあんまり分らないんだけど(笑)、なんか涙が出そうになるんです。

寺 それ分かる。なんか分かるようによく分からない部分がありますよね(笑)。でも、脳じゃなくて、なんかこうハートに響くというか。

高 なんかね、写真も文章も『するめ』感がありますよ。

ふわっと関わる入口に

—するめって何だろう(笑)。ありがとうございます。最後に、これからのグッチョへの期待とか、どんな存在であってほしいとか。未来に向けた話をして終わればと思います。

寺 私、昨年ぐらいから「共事者」っていう言葉を使ってるんです。福祉って、当事者と支援者がいて、なんかそこだけの世界って思われがち。じゃあ、それ以外の人たちってどういう関わり方があるんだろうと考えた時に、共事者っていう言葉ってすごくしっくりきたんです。当事者でもないし、支援の経験もない。でも、なんかこう、ふわっと関われる距離感。そんな存在が増えるといいなと思うんです。

で、さっきの話の続きになるんですけど、取

材の時のスタンスって、支援の専門職としての立ち位置じゃなく、友達みたいなフラットな関係性だったんですよ。そういう関わり方とか関心の持ち方って、当事者とか支援者以外の人たちこそ持てるものなんじゃないかな。グッチョって、共事者意識を久留米に広げていく一つの媒体だと思うし、地域福祉にみんながふわっと関われる入口みたいな印象を持って。いろんな課題を重たく表現するだけではなく、身近な人や地域で願いを叶え合っているんだよっていう、今の表現の柱は残して欲しいなと思います。

藤 私が活動しているA U・f o r m a l 実行委員会は、38号から後半2ページを制作しています。市役所から出している媒体を民間と一緒に編集していることをいろんな課の人に知ってほしいし、今後はもっといろんな職員さんと一緒に取材に行きたいです。市役所の内も外も、重なり合うツールにできるといいな。

—そうですね、組織の壁も官民の立場の違いも越える舞台にできれば素敵ですね。高野さんはいかがですか。

高 本当に私はグッチョが大好きで、本当に救われた言葉があるので、どういう形であっても続いていてほしいです。

もちろんグッチョは属人的に『爆誕』したと思います。でも、よくある『〇〇運動』とか書かれたボールペンをもらっても何も伝わらな





暮らしの中の「し合う」ストーリーは いつも、いつまでも

私はこの春、地域福祉課を去ることになりました。創刊時、こんなに多くの人に関わってもらえるとは想像していませんでした。グッチョと出会い、向き合ってくれた皆さん、本当にありがとうございました。

発行を通して地域共生社会らしい「し合う」を共有する大切さを実感しました。これまでに掲載した40のストーリーはこれからもずっと残り続けます。そして、この瞬間もグッチョな物語は暮らしの中で生まれ続けているでしょう。

グッチョの今後は、これから関わってくれる人と一緒に決めていきたいと思います。市役所のカラーコピー機から生み出されてきた熱を帯びた冊子は、どんな姿で皆さんと再会するのか。楽しみに待っていてください。

本紙創刊・編集担当 秋山太

グッチョと私、そしてこれから 終わり



いし、何も感じない。取材をして記事にすることで、触れた人が『ああ、そういうことなんだね』って実感が生まれるはず。だからみんなで一緒にグッチョを作ってほしい。市役所と市民をつなぐ『橋渡しのスタンダード』になってくれたらいいと思います。

淵 私、やっぱり思うんですけど、秋山さんが異動したら、どうしてグッチョを続けられないんだろう。だって、グッチョは誰でも書ける媒体なら、ずっと関わっててもいいんじゃないかって思うんです。私はコピー機で印刷している今のグッチョが好き。せつかくこの形で生まれて4年にもなろうとしている。ストーリーもこんなに生まれてきて、その一個一個に響いている人が確実にいるっていうものを、どうしてやめなきゃいけないのって思ってしまうんです。地域課題ってどこの部署にもあるんだから部署なんか関係ない。そもそも市民に人事異動なんて事情は関係ないんだし。

高 そうそう、もともと事業予算なんてないんですよ。じゃあ関係ないですよ。予算ゼロで良かったじゃないですか(笑)。

ーこの想定できない展開が面白いですね(笑)。グッチョは『いろんな垣根を乗り越えるメディア』もテーマ。今日はこのメンバーでいろいろと乗り越えた感じですね。今日はありがとうございました。

その他の号の一部を紹介
(左) 創刊号。紹介したのは13年間家の前で通行人へのあいさつを続けている敬老おじさん (中) 多くの反響が寄せられた23号。50歳差の同級生の物語 (右) 直近発行の39号。「障害者×アート」ではくれない家族の思いを取材



AU-formal実行委員会と共同編集した36号。「叶え合う参加支援事業」を受託している団体で、現在も後半の見開き2ページを制作。今後は本紙の共同発行の意向も示してくれています



一緒にしゃぼん玉を吹いてみようじゃないか

～地域共生社会の新しい風を感じた日～

記事：池田 彩

令和7年2月9日(吹くの日)、重層フェス「叶え合う支援～叶え合う支援を自分のものにする日～」が筑後川防災施設「くるめウス」で開催されました。総勢100名が集まり、ワークショップに参加し、シャボン玉を吹きながら、従来の支援とは少し違う「叶え合う支援」を実感しました。どんな取り組みがあったのか、主なものを3つ紹介します。

会場中に広がった「叶え合う」ガールランド

受付をすませて最初にあったのは「LET's 叶え合うシート」ブース。事前に準備されていたワークシートに自分と思い浮かべた誰か(自分だけでなくOK)のステキなところや不安なこと、夢や希望を書き込み、最後に「私たちが一緒にやりたいこと」を書いてみるというコーナーです。一緒にやりたいことは三角の色紙にも書き、ガールランドのように会場中に飾りました。書いた方からは、「相手の良いところはすぐに思いつくけれど、自分のことは思い浮かばなかった」「自分と向き合ういい機会になった」というコメントが。自分のことも相手のことも大切に考える時間ができたからか、晴れやかな表情になっていたのがとても印象的でした。ガールランドには「ピクニックに行きたい」「地域福祉士を目指したい」「心配ごとを相談し合う」などが書かれており、色とりどりの「叶え合いたいガールランド」が会場中に広がりました。

じっくりじっくり話を聞く「企業ブース」

会場の奥にあったのは「企業ブース」。訪れた方がどんなことに興味関

た。地域共生社会とは、世代や分野を超えてつながり、住民同士の暮らしや生きがいを支え合いながら地域をともに創っていく社会のこと。シャボン玉は老若男女、誰でも楽しめるため昨年から企画がスタートしました。イベントに参加した方だけではなく、通りすがりの家族連れなど約60名が参加。2時9分の掛け声と同時に風に乘ってゆるやかに上がるシャボン玉の様子に歓声と拍手が沸き起こりました。「2月9日、2時9分は、日本中でシャボン玉を吹く」、そんな未来も近いかもしれません。

会場の筑後川防災施設「くるめウス」館長・川嶋さんからは「昔から川はリラックスしたり、自由に遊んだりする場でした。福祉・教育×川」というテーマで何かできるのではないかとこれまでも考えてきたので、このような形で活用してもらえることはとても嬉しいです。「叶え合う」に通じるのかと思います」と話します。

「叶え合う支援」とは、特別なことをするのではなく、自分と相手のことを考えてみたり、耳を傾けてみたり、一緒に楽しんだりするなど、ちょっとしたことからじまるのかもしれない。

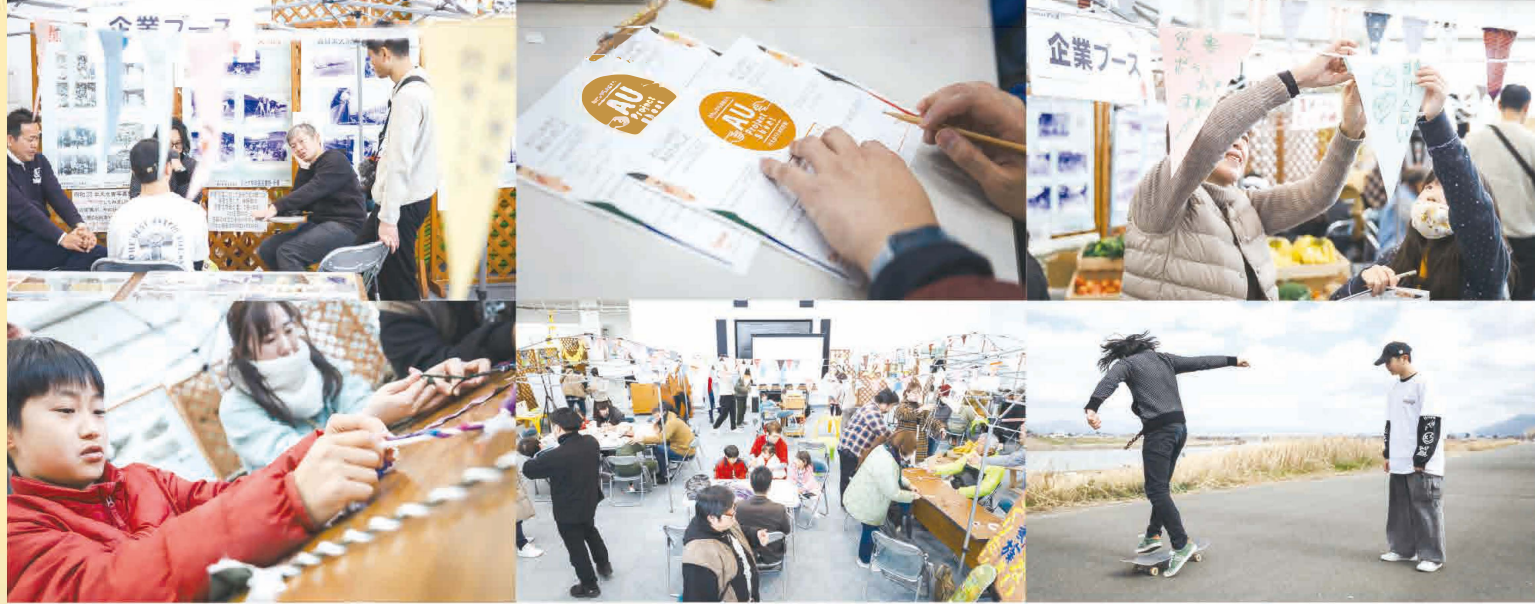


事業を担う「個」の集合体 久留米 AU-formal 実行委員会

市民活動団体で活動する個人が集まり結成。今年度から参加支援事業を担います。



※写真は、久留米重層フェスの様子



2時9分、みんなでシャボン玉を吹こう

2時9分には、草加市(埼玉)、名古屋市(愛知)、廿日市(広島県)、下関市(山口)、奄美大島(鹿児島)、そして私たち久留米市と6市同時中継で一緒にシャボン玉を吹く時間もありません。



特別号
叶え合う支援
詳細掲載!

グッチョ
Vol.36 特別号



＼地域福祉マガジン／



久留米市
健康福祉部地域福祉課
〒830-8520
久留米市城南町15-3
☎0942-30-9175
Fax0942-30-9752

＼グッチョの記事はWEBに／
グッチョは市ホームページで読めます

